

シングル・ファザー

Mogens Christoffersen and Lars Jalmert

世界中で集積されている父親の実態とその生活状態に関する研究の多くは、専ら「悪い」父親に関するものである。父親不在、我が子を虐待する父親、子どもの生活から見えなくなっている父親、そして、その他の「悪い」と考えられ、否定的な影響を与える父親について研究報告がなされてきた。我が子の近くに住み、我が子への責任をとる父親に関する研究は僅かしかない。我々は、二つの新しい研究プロジェクトで、我が子の近くに住む父親と彼らの生活状態に焦点を当て調査を実施した。プロジェクトは、異なる方法と異なる研究グループで実施されたが、相違を把握することができるようその密接な共同研究によって行なわれた。まだ、両方のプロジェクトのデータ収集期間中であるが、確実な出発点と仮説を書き記す事はできるだろう。

デンマークとスウェーデンの両国では、0歳から17歳の子どもの約80%が両親と暮らしている。子どものおよそ15%は、どちらかの親と生活している。そのうちの85～90%が母親と暮らし、10～15%が父親と暮らしている。デンマークでは18000人の子が父親と暮らし、スウェーデンでは37000人の子が父親と暮らしているのである。各年齢毎にみると、0～6歳の子どもの90%近くが両親と暮らしている中で、わずかに3%の子が、毎年、両親の別居を経験する。

初期の研究によれば、スウェーデンでは、子どもの年齢が高ければ高いほど、またその子が男子であれば、離婚後に父親と共に住む可能性がより高くなることを知っている。さらにまた、他の世界的な研究の結果は、ワークショップにおいて紹介されるだろう。

様々な調査報告が、シングル・ファザーと他の父親との違いを指摘している。主に2つの状況がある。一つは、子どもに対する責任を果たそうと積極的に努力している父親がおかれている状況。たぶん、これらの父親は、他の父親よりも、その責任を果たすのにより良い条件を準備することができる。たとえば、賃金が高いとか、仕事や社会的地位が高いとかといった…。二つめは、父親が、子どもに対する責任を取っている理由が、母親が様々な理由によりその責任を取れないことによるのかもしれないという状況。これらの二つのケースは、おそらく、父親によって果たされる責任の取り方、視点が違っている。そして、我々の研究は、そのような相違に関しても注目している。

初期の研究では、両親別居後の子どもの幸福に影響を与える三大要因が示されている。

1. 別居後の両親が幸福であるかどうか

子どもの幸福には、別居後の両親が幸福かどうかが大いに影響する。比較的幼い子どもでさえ、大人の感情の変化に対して敏感になる。最近の研究によれば、幼い子が早い時期にプライドや羞恥心そして罪悪感といった複雑な感情を身につけるという。そのため、もし大人がストレスにさらされているなら、これは子どもへと伝わる。いくつかの研究では、困窮する一人親は、子どもに対する支援が少なくなることが示されている。

導き出した仮説の一つは、親のジェンダーが問題なのではなく、両親がいかに別居後の新しい状況に適応できるかを考慮するということである。子どもへの影響力という観点から重要なことは、おそらく、たとえば一人親が経済上の問題に苦しんでいないかどうかということであろう。失業や厳しい経済状態は、子どもへの支援やかかわりが少なくなるという親の態度をもたらす。その結果は子どもの自尊心に影響する。

2. 両親の争いと協力

180組の離婚に関する調査研究では、子どもがいかに別居後の状況に適応するかという点で最も決定的な因子は、両親間に争いがあるかどうかであるとの結論を下している。したがって、他の子どもたちが長期にわたる問題を持っているのに、ある子どもたちは、親の別居後も何の問題もなしに両親の離婚に適応できていることの説明が、しばしば、両親の間に争いがあるかどうかで証明できる。

3. 親を失うか親との関わり合いを続けるか

いくつかのシングル・マザーに関する研究において、三つめの要因は、別居後子どもがいかに上手に適応するかという観点が重要であるということが示されている。具体的にいえば、両親との意義ある関係が維持されているかどうかである。多くは父親である別居した親と子どもの親しく温かな関係が継続されるということが非常に重要であるように思われる。

調査研究では、両親の離婚が子どもに対し直ちに明白で否定的な結果を導くのではなく、多くの要因が影響していることを示している。

この調査を出発点として用いることは既に実行されており、我々自身の研究から導かれた仮説は、シングル・ファザーと彼らの生活状態の問題においても有益であろう。

(小林由美)